下水道

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

下水道

【Ｎコード】

Ｎ７６７７Ｄ

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ラスベガスの下水道に何かが出ると聞いたタブロイド記者フランコは取材に行かされる。そこで偶然知り合った刑事と一緒に下水道に入るとそこには。アメリカの下水道には本当に鰐がいるそうです。

第一章

下水道

ラスベガスで今話題になっていること。それは下水道に何かが出るということであった。
「鰐じゃないのか？」
誰かが冗談交じりにこう言う。ニューヨークの下水道では捨てられた鰐が下水道の中で育って生息しているのである。白くかなり大きなものである。
「多分それだろ。無責任な飼い主は何処にでもいるさ」
「いや、どうもそうではないらしい」
それを否定する言葉も出て来た。
「どうやらな。得体の知れないものらしい、これがな」
「得体の知れないもの！？」
「何だそりゃ」
皆そう聞いて眉を顰めずにはいられなかった。
「化物でも出るのかよ」
「そうかも知れんな」
「そうかもって」
「一体下水道には何かいるのかよ」
人々が不安を感じているところで。どういうわけかこういう噂まで出るのであった。
「下水道を調べた市の職員が消えたらしい」
「消えた！？」
「ああ、それでな」
話はさらにとんでもない方向に行く。
「後に残ったのは」
「何なんだ！？」
「不気味な匂いだけらしい」

「下水道は匂うものだろ」
「なあ」
　これは言うまでもないことである。しかし話は既にその言うまでもないものから有り得ない程とんでもない方向に向かっておりそれは修正されなかった。
「それがな。下水道の匂いとは全然違っていてな」
「また別の匂いか」
「それが何かまではわからないけれどな」
　噂の根拠はやはり不明であったのだ。
「凄い匂いらしいぜ」
「凄いねえ」
「一体何なのやら」
「大蛇って噂もある」
　何処からか誰かが言った。
「大蛇！？鰐じゃなくてか」
「アナコンダっているだろ」
　南米、特にアマゾン川流域に棲息する巨大な蛇である。殆ど水の中で暮らしておりその身体は一説によると二十メートルを越えるとまで言われている。アマゾンを象徴する動物の一つであり多くの者がその巨大さと共に名前を知っている存在である。
「あれがいるって噂があるな」
「鰐より凄いな、それだと」
「人間なんか一たまりもないよな」
「何か下水道が怖くなってきたぜ」
　こう言い出すとマンホールまで怖くなるのだった。その入り口の。
「果たして何がいるやら」
「マンホールをこじ開けて何か出るかもな」
　話はラスベガスから各地に飛んでいった。ネットを通じて世界中で話題になってしまった。日本でも中国でも台湾でも欧州でもオカルトだのＵＭＡだの宇宙人だのといった話でラスベガスの下水道に

ついてあれこれと噂が立っていた。それはサンフランシスコにも届いていた。
「話は聞いているよな」
「ええ、まあ」
浅黒い肌に無精髭を薄く生やした痩せた男がディスクに座っている男に対して答えていた。ここはサンフランシスコの所謂イエローペーパーの編集部である。もっぱら宇宙人や幽霊やそういった存在を面白おかしく書いてそれを売っているのである。日本にもよくあるあからさまにわかる白々しい嘘記事を売りにしている場所である。
「それでだ」
「取材に行けって言うんですか？」
その浅黒い肌の男はディスクに座る禿げて太った黒人に対して言うのだった。
「ラスベガスまで」
「話が早いな」
黒人はそれに応えてにこりと笑ってみせた。白い歯がやけに目立つ。
「それならすぐに」
「それじゃあここにいても書けるじゃないですか」
だが男はこう返すのだった。
「それがこのレロン＝フランコのいつものやり方ですしね」
「しかしだねフランコ」
黒人はそう言ってきたフランコに対して言い返す。
「私としてはそれはあまりよくないと思うんだよ」
「やっぱりあれですか。歩いてこそ」
「そう、例え我々であってもだ」
あからさまな嘘記事を書いているにしてもだ。
「そうでなくてはいけないだろう。ジャーナリズムなのだから」
「けれどカンセコ編集長」
あえてかどうかわからないがその黒人の名前と役職を言ってみせ

てきた。
「それで書いてもどうせ宇宙人ですよね」
「いいや、そうとは限らない」
だがカンセコはそれも否定する。
「ひょっとしたらイラクの芸能人が潜伏しているかも知れないじゃないか」
「うちの記事でしたらそれは有り得ますね」
その有り得ない嘘記事こそが売りなのだから仕方のないことではあった。もっともそれを信じて勝って読む人間もサンフランシスコにはいないのであるが。
「けれどそれなら」
「ここにいても出来るのかい」
「そう考えますけれど」
「よし、じゃあこうしよう」
フランコがどうしても行きたくないというのでカンセコは遂に切り札を出して来た。

第二章

「遊んでき給え」
「ラスベガスでですか」
「そうだ。それならいいだろう？」
フランコを見上げて問う。
「遊びで行くのならな。取材はついでだ」
「まあ確かにそうですけれど」
だがそれはそれでフランコは聞きたいことがあるのであった。
「けれど編集長」
「何かね、今度は」
「随分気前がいいですね。一体どういう風の吹き回しですか？」
尋ねながら笑顔を作ってみせてきた。ラテン系の笑いであった。
「ついでに首とかですか？」
「馬鹿言っちゃいけない、うちは常に人手不足だ」
そうした壮絶なまでのインチキ記事を書ける記者が少ないからだ。そんな才能があれば変わり者以外は小説家になっているか漫画家になっているからだ。つまり彼等は変わり者というわけである、
「君を辞めさせたら大きな損失だ」
「じゃあ何でそんなに気前がいいんですか？」
それでもフランコは尋ねるのであった。
「何かあるんじゃないかって思うのが普通ですけれど。遊んで来いなんて」
「ただの社員への慰労だよ」
しかしカンセコは笑って言葉を返すのであった。
「君は最近ずっと休暇と取ってからな」
「そういえばそうでしたね」
フランコも言われてそれに気付いた。自分のことであるのにだ。
「ずっとここでネットを見ながら書いていましたからね」

「やはりネットか」
「役に立ちますよ、情報収集には持って来いです」
笑いながらカンセコに述べる。
「そりゃ歩くのよりも」
「言うな。まあいい」
とりあえずフィールドワークをメインに考えるカンセコには喜ばしい話ではなかったがそれはここでは置いておいた。そうしてまた言うのであった。
「とにかくだ。それでいいな」
「有給休暇ですね」
「そういうことだ。暫く羽根を休めてくるんだな」
「わかりました。そういうことなら遠慮なく」
「うん」
こうしてフランコは有給休暇を取ってラスベガスに入った。だが早速あるマンホールの前で制服姿の警官に呼び止められたのであった。
「ああ、あんた」
「俺はジャーナリストだぜ」
振り返ってすぐにこう答えた。そうしてボディーチェックを受ける。
「な、そこに書いてあるだろう」
「ああ。何かマンホールをちらりと見たからな」
身分証明書にはちゃんとジャーナリストと書いてある。他には免許証も見られた。警官はそういったものを見ながら彼にマンホールの話を出してきたのであった。
「馬鹿なことをするんじゃないかと思ってな」
「下水道に入るってか」
「そうだ。最近変なことを考える奴が多い」
白人の顔だが微妙に肌が赤いその警官が言う。
「それを止めるのに少し神経を使ってるんだ」

「そうだったのか。お疲れさんだね」
「少しな。しかしもう話は聞いてるんだな」
警官はフランコの言葉を聞いてそれに気付いた。
「そんなに有名だったのか」
「有名も何も世界中で話題になってるぜ」
フランコは身体検査を受け終えてから応えた。身体を彼に向けたまま。
「何が出るかってな」
「おいおい、世界中にかよ」
「何人も行方不明になっているそうだな」
それも彼に対して言うのだった。
「下水道の下で」
「さあな。それは知らないがな」
警官はそれについてはわざと知らないふりをしてみせた。フランコにはそう見えた。
「知っているんじゃないのか？本当は」
「本当のところは俺も知らないさ」
やはりこれもフランコにとってはとぼけているように見えた。
「本当かね、それは」
「本当じゃなかったらどうするんだ？」
「さてね。調べるだけさ」
彼は平気な顔をして警官に告げた。
「それがジャーナリストだからな」
「それで死んでもかい？」
「いや、死ぬのはちょっとな」
その質問に対しては軽い調子で笑って返した。
「勘弁願いたいな」
「やっぱり命は惜しいか」
「当たり前だろ。それに今は休暇で来ているんだしな」
それもまた警官に対して言った。

「何でそれでわざわざ命をかけて行くんだか」
「けれど命懸けじゃなかったらどうするんだ？」
「さてね」
その問いにはとぼけて返す。
「わからないね、そこんところは」
「とぼけるねえ。まあいいさ」
警官はここまで聞いたところで彼から離れるのだった。
「注意はしたぜ。けれどもそれで何かあったら」
「警察は責任持てないってか」
「そういうことさ。それだけじゃない」
彼はこうも言う。
「若し勤務中の警官に捕まったら今度はアウトだぜ」
「アウトか」
「勤務中ならな。覚悟はしておけよ」
「精々制服の警官には気をつけるさ。それじゃあな」
「おい、最後に聞きたいんだが」
だが警官は去ろうとするフランコにまた声をかけてきたのであった。

第三章

「何だい？」
「あんた、名前は何ていうんだったかな」
「あれ、さっき身分証明書見ただろ」
フランコは彼の言葉を聞いて目を丸くさせた。
「レロン＝フランコだよ」
「そうか。俺はラルフ＝マクガイア」
警官はこう名乗ってきたのであった。
「覚えておいてくれよ」
「何だ？あんたアイリッシュか」
彼は警官の名前を聞いてそう問うた。『マク』やが姓の先に付くのはケルト系の証である。例えば彼だと『ガイア家の息子』というふうになるのだ。マッカーサーにしろこれによりケルト系であるとわかる。彼はスコットランドからの移民の子孫であったのだ。
「その名前だと」
「親父はそうさ」
マクガイアはそう答えてきた。
「お袋はネイティブだけれどな」
「肌はそんな感じだな」
「そうさ。まあ複雑な環境だろ」
「そうか？アメリカだったら普通だろ？」
フランコは笑ってマクガイアに言い返した。
「そんなのは。俺だってメキシコからの不法移民の子だしな」
「まあそうだな。それはお互い様か」
「そういうことだな。じゃあまあこれでな」
「ああ、またな」
彼等はこれで一旦は別れた。だがその夜フランコは一遊びした後で夜の街に出ていた。目的はやはり一つであった。

夜のラスベガスは明るい。ネオンで様々な色に輝いている。その中では一儲けして笑顔でいる者もいれば大負けして怒り狂っている者もいる。美人を横にはべらせて飲んでいる者もいれば怪しげな店に入って悦に入っている者もいる。やはりここはラスベガスであった。夜にこそ輝く街であった。その街の中を彼は一人周囲を探る目で歩いていたのだった。

「やっと見つけたな」

周りに誰もいないのを見計らって呟く。

「ここで行くか」

「何処に行くんだよ、おい」

ここで後ろから声がしてきた。振り返るとネオンの派手なアルファベットを後ろにしてそこにジャケットとジーンズの男が立っていた。

「言っただろ？制服の警官に見つかったらやばいってな」

「何時からラスベガスの警官の制服はジーンズになったんだよ」

フランコは笑ってそのジーンズの男に言葉を返した。

「俺の記憶じゃ昼にはまだ制服だったよな」

「ああ、その通りさ」

ジーンズの男は声を笑わせながら近付いてきた。見ればそれはマクガイアであった。

「だから今は捕まえないさ、安心しな」

「まさかずっとマークしていたのかよ」

「いや、それはない」

マクガイアはそれは否定した。そうしてフランコの前に来ていた。

「たまたま遊んでいたら御前さんがいたのさ。偶然ってやつだな」

「いや、それは腐れ縁だな」

フランコはこう言い返した。

「それはな」

「まあそれでもいいさ。それでもな」

「ああ、それで俺は今からな」

フランコはそのマクガイアに対してまた言う。
「ちょっと行って来るぜ」
「何だ、一人でか」
「あれ、そのつもりだったんだけれどな」
軽い調子でまた言葉を返す。
「違うのかい？」
「言っただろ？非番だ」
声も顔もそれまでよりも笑ってものになっていた。
「だからな。今は法律に触れない限り何をしてもいいんだよ」
「へえ、じゃあ俺について来るっていうのかい」
「いや、マンホールの下に俺の別荘があるんだ」
そう冗談めかして言うのであった。
「だからな。ちょっと別荘に取りに行くものがあってな」
「それで行くだけか」
「そうさ。道は多分同じだろうな」
「そうかもな。じゃあ一緒の道を行こうぜ」
「道連れってやつでな」
そんなことを言い合いながらマンホールの蓋を開けて中に入る。
下水道の中は中央に川のように汚水が流れ両脇が廊下になっていた。
灯りは何もなく暗く湿った中で時折水滴の音が聞こえるだけだ。足元に鼠が時々見える以外は何も見えはしない。
「何だ、何もないかもな」
「いや、わからないぞ」
その到底快適とは言えない周りを見ながら言うマクガイアにフランコが言ってきた。
「まだ中に入ったばかりだしな」
「それもそうか。しかしな」
マクガイアはここで顔を顰めさせた。それと共に鼻を摘んだ。
「臭いな、やっぱりな」
「下水道だからな、やっぱり」

見ればフランコもその彼と同じ顔になっていた。
「匂うのも当然さ」
「それもそうか。それで噂だとな」
「大蛇か宇宙人がいるんだってな」
「それだったら何時そこから出て来てもおかしくはないよな」
そう言いながら川のように流れている下水を指差して言う。
「くわって首をもたげてな」
「一応持ってるものは持ってるぜ」
フランコは懐を叩いて笑ってみせた。
「それもマグナムをな」
「大蛇でも一撃ってやつか」
「そういうことさ。あんたも持ってるだろ」
「一応はな。何しろ物騒な街なんでな」
そこはやはりアメリカであった。
「いつでも用心はしているさ」
「シスコよりも危ないのは確かだろうな」
「何だ、あんたそっちから来たのか」
「ああ、そうだぜ」
笑ったままマクガイアに答えてみせる。

第四章

「そんな顔してるだろ」
「顔でそこまでわかるかよ。しかし本当に何が出てもおかしくはないな」
また周囲を見回しながら言うのだった。
「ここは。急にアナコンダが顔出してきたらと思うと怖いな」
「全くだぜ。けれどあれだろ？」
ここでフランコはふとした感じで言うのだった。
「アナコンダってでかいよな」
「ああ」
これは言うまでもないことであった。だからこそ有名なのだから。
「それがどうしたんだい？」
「餌、あるのかね」
彼が考えたのはそこであった。
「そんな百フィートかそこいらありそうなのがここで生きていけるのかって考えてな。そこんところはどうだい？」
「ニューヨークじゃ鰐がいるじゃないか」
マクガイアもまたニューヨークの話は知っているようであった。やはりこの話はかなり有名であるらしい。
「それじゃあラスベガスにアナコンダがいても不思議じゃないだろ」
「餌は鰐のそれと同じか」
「ここは鼠もでかいしな。数が多い」
見れば確かにだ。脇に時々いる鼠はかなり大きいしそのうえ数も結構なものだ。それだけこのラスベガスが繁栄していて鼠の栄養となるものも多いということなのだろう。なおニューヨークのサウスブロンクスの鼠はそれこそ猫よりも大きくなっているとさえ言われている。
「それを食ってるんじゃないのか？」

「鼠ねえ」
フランコはそれを聞いてまた考える顔になった。
「だといいけれどな。いや」
「いや？」
「何かアナコンダだったらまだいいかもって思えてきたな」
今度はこう言うのであった。
「何となくだがね」
「何となくでも随分物騒なことを言うな」
マクガイアの問いは苦笑いを含んだものになっていた。
「あれかい？やっぱり宇宙人がいるって言いたいのかい？」
「まあ俺の会社はそうした記事が大好きなんだがね」
フランコの方でもそれは否定しなかった。
「実際のところ」
「まあ記事は記事だな」
マクガイアはそれと現実を分けるように言い表すのであった。
「実際のところ現実は違うさ」
「そうありたいね。けれどもう結構歩いているけれどな」
また下水道の周りを見回す。目は慣れたら見えるものは殆ど変わらず彼もどうにも退屈したものを感じるようになってきていた。
「何も出ないな」
「いるのは鼠だけか」
「どうする？続けるかい？」
フランコはこうマクガイアに尋ねてきた。
「それとも帰るかい？」
「おいおい、俺に振るのかよ」
マクガイアは彼の言葉を受けてまた言葉に苦笑いを含ませて言ってきた。
「そりゃお門違いってやつだろ」
「決めるのは俺か」
「そうさ。それでどうするんだい？」

彼はあらためてフランコに尋ねてきた。
「続けるかい？どうする？」
「そうだな。飽きてきたしな」
フランコは一旦はこう言う。
「じゃあ帰るのかい？」
「いや、もう少し続けよう」
だが彼はここでこう言うのであった。
「上に上がっても特に何もすることはないしな」
「酒とか博打もかい」
「酒はともかく博打はな」
フランコはそちらにはいい顔をしなかった。どうたら彼としてはあまり好きではないらしい。
「別にどうでもいい」
「そうなのか」
「だからな。特にすることもないし」
また言う。
「もう少し見回ってみるか」
「そうするか。といっても何もなさそうだな」
マクガイアはここでまた辺りを見回す。やはり何もない。下水と暗く湿ったコンクリートの通りと壁、それと鼠が見えるだけだ。後はマンホールの上りだけである。
「只の散歩と変わらないな」
「散歩だったら奇麗な女の子と一緒にしたいね」
「言うねえ。まあこんなところ女の子と一緒には行かないな」
「そういうことだな。んっ！？」
ここで遠くに灯りを見るのだった。
「職員の見回りか？」
「そうかもな。隠れるか？」
「ああ。見つかったら色々と面倒だしな」
「そうだな」

フランコとマクガイアの意見が一致した。丁度角を曲がったところだったので角の陰に一旦隠れる。光は前からやって来ていてしかも反対側の通路であった。かちあう可能性がないのが二人にとってはまずは幸運なことであった。

「何か声が聞こえるな」

「ああ。何だこれは」

二人はその灯りのところから声が聞こえるのに気付いた。それは何か歌っているようであった。さらに聞いているとそれが何の歌かもわかった。

第五章

「何だこりゃ」
「賛美歌だぜ」
二人はそれに気付いた。物陰に隠れながらそれを聞いて怪訝な顔になるのであった。
「下水道に賛美歌ねえ」
「また変な話だな」
「変な話どころじゃないな」
フランコはここで首を傾げた。
「カタコンベじゃあるまいし。妙な話だ」
「あれかい？昔のことを思い出して色々とやる宗派じゃないのか？」
アメリカには様々なキリスト教の宗派が存在している。これは欧州で弾圧を受けたその宗派がアメリカに逃れたことやそもそもキリスト教の信仰が篤いこともある。事情は様々であるがどちらにしろアメリカには様々なキリスト教の宗派が存在しているのは事実である。
彼等はそんなことを考えながら様子を見ていた。しかもその賛美歌は二人に近付いてくる。向かい側の通りなので遭わないことを僥倖として彼等はさらに見る。するとここでとんでもないことを見て知るのであった。
「司教様」
「うむ」
見れば彼等は法衣に身を包んでいる。そうして十人程で歩いている。その先頭にいる男は髭を腹のところまで伸ばし髪も切ってはいない。その為かなり異様な外見をしていた。
「昨日揃えるものは全て揃えました」
「で、あるか」
司教と呼ばれたその男はすぐ後ろにいる男の言葉を聞いて満足し

たように頷いていた。
「それは何よりだ」
「ではいよいよ決行ですね」
「そうしよう」
　またその男に答えてみせる。
「ここから一気に毒ガスを放てば」
「この堕落した街ラスベガスは忽ちのうちに死の街になります」
「そう簡単になるかよ」
　マクガイアはそれを聞いて苦笑いを浮かべた。
「ラスベガスっていっても広いぜ。そうそうは」
「おい、声が大きいぞ」
　フランコは小声でその彼を注意してきた。二人はまだ隠れ続けている。
「聞こえたらやばい。気をつけろ」
「そうだな。マジでカルト団体みたいだな」
　彼もそれは察していた。そもそも真っ当な団体がこのような場所にいる筈がないのだ。いるとすればテロリストかその彼等のようなカルト団体か。何れにしても表を歩けないような、そうした者達であることはわかることであった。
「用心するか」
「そういうことだ。捕まったら本当に何されるかわからないからな」
「そうだな」
　そう言い合ってから二人は身長に言葉を慎んだ。そうしてそのカルト教団の様子をじっと見守るのであった。見れば彼等はまだ話をしていた。
「では間も無く時が来る」
「そうです。我等の理想社会を実現する時が」
「腐敗も堕落もない世界」
　司教と呼ばれる男は血走った目で言っていた。
「それがいよいよ実現するのだ」

「腐り果てた世界が消え去り」
彼等の目には狂気があった。それに基いて話していた。
「腐敗も何もかもがなくなるのだ」
「その通りです。いよいよ」
「何かああしたカルトっていうのは」
フランコは彼等の話を聞きながら呟くのであった。
「どうしてああも理想社会とか言ってテロに走るのかね」
「自分達以外の考えや存在を認めないからだな」
フランコの呟きに大してマクガイアは真面目な感じで応えてきた。
それまでの軽い調子は何時の間にか完全に消えてしまっていた。
「だからカルトなんだよ」
「何だ、わかってるんだな」
フランコは彼のその言葉を聞いて言う。
「そうしたことも」
「警官だぜ。そういうことは頭どころか身体に叩き込まれているさ」
それまでのマクガイアの顔に戻って応えてきた。
「警官になってすぐにな」
「そうか。それでどうする？」
「どっちにしても放ってはおけないな」
マクガイアは真面目な顔に戻って彼に言った。
「ここはやっぱりな」
「上に話すか」
「とりあえず証拠写真も撮った」
携帯を出してみせてきた。それを使ったのである。
「それも何枚もな。これでいいだろう」
「どうして撮ったかは言うのかい？」
「ああ」
フランコのこの質問にも答えた。
「街でマンホールに入った怪しい奴を追跡して発見した。これでいいな」

「嘘つけ」
フランコは今のマクガイアの言葉にはシニカルな笑みで返した。
「それは違うだろうが」
「こういう嘘は許されるだろ」
だがマクガイアは平気な顔でこう言葉を返すのであった。
「正義の為だからな」
「正義の為には嘘もいいのかよ」
またシニカルな笑みを彼に向けてみせた。
「警官がそれでいいのかね」
「目的が正しければそれでいいだろ」
それが彼の返事であった。

第六章

「違うかい？ケースバイケースさ」
「まあそれもありかもな」
フランコも基本的にそうした考えの人間なのでそれには同意した。実際のところ彼もそれなりの正義感はあるのである。少なくとも普通の人間のレベルにはある。
「まあいいさ。被害が少なくても毒ガスを撒かれたら洒落にならないしな」
「そういうことだ。それじゃあそういうことでな」
「わかった。じゃあ戻るか」
「ああ、これでな」
証拠は手に入れた。ならばここにいる必要もない。そういうことであった。
「帰るか」
「わかった。じゃあ俺も今回は真面目な記事を書けるな」
「真面目な記事っておい」
マクガイアは今のフランコの言葉に顔を顰めさせて問うた。
「どういう意味だ、今のは」
「俺のいる新聞は特別でね」
二人はもう帰路についていた。一応周囲に気を使いながら上に昇ってマンホールを空ける。そこから外に出ながら話を続ける。
「本当のことは書かないんだよ」
「じゃあ何を書くんだ？」
「でまかせさ」
マンホールを出たところでおかしそうに笑ってマクガイアに言うのであった。
「でまかせを書くのが俺達の新聞なんだよ」
「それは新聞なのか」

「そういう新聞もあるんだよ」
マンホールから上半身を見せてきたマクガイアにまた言った。街は相変わらず様々なネオンで輝いている。ここからもうバニーガールの嬌声が聞こえてくるような賑やかさであった。
「膨大な資料を綿密な検証で調べてな」
「それは真面目だな」
「そこからでまかせを書くんだよ」
それがフランコの弁であった。
「できるだけ面白い記事をな」
「そうした新聞もあるんだな」
「カルト教団がいなかったら今頃ラスベガスのマンホールには宇宙人がいたってことになっていたな」
「宇宙人か」
「それが一番受けるんだよ」
彼の新聞ではそうなのであった。
「宇宙人がいるって記事がな」
「しかしそれがカルトになったな」
今度は本当のことだ。でまかせではない。
「さて。これは書きがいがあるな」
「随分楽しそうだな」
「たまに本当のことを書くのがいいんだよ」
フランコの弁である。何かそれを楽しんでいるといった感じであった。
「それが一番面白いのさ」
「そういうものか。何かあんたの新聞見たくなったな」
「じゃあシスコに来ればいい」
そうマクガイアを誘ってきた。
「そうしたら見られるさ」
「わかったぜ。じゃあ今度な」
ネオン街を歩きながら話をする二人であった。ラスベガスの地下

で狂信的なカルト教団がいてテロを策謀していたということはすぐに世界中の話題になったのであった。
「これが出るとは思わなかったな」
「そうですね」
フランコは編集部でカンセコの言葉に応えていた。その教団のことを書いたフランコの記事をそれぞれの手に持って話をしている。
「しかし」
「しかし。何ですか？」
「案外身近なところにいるものなのだな」
カンセコは記事を片手に怪訝な顔になっていた。
「有り得ないような集団が」
「見えない場所は意外と側にあるものですよ」
フランコはしたり顔でこうカンセコに告げた。その言葉と一緒に自分の席に座って偉そうに足を組んでからコーヒーを飲むのであった。ブラックである。
「それが下水道だったってことですよ、今回は」
「そういうものか」
「案外ですよ」
そして彼はまた言う。
「宇宙人も隠れているかも知れませんね」
「うちの普段の記事みたいにか」
「はい、その通りです」
半分笑っていて半分真剣な顔と声であった。
「ひょっとしたらですけれど」
「そうかもな。下水道に鰐や大蛇どころかカルト教団が隠れていた」
それは事実だ。事実を前にしてはどんなでまかせも薄れる。もっともその事実を実際よりも遥かに大きくして話すことはできるのだが。
「それを考えたら有り得るか」
「ひょっとしたらですけれどね」

「だとしたら俺達も本当のことを書いていることになる」
カンセコはここでおかしそうに笑ってみせた。
「でまかせを書くのが売りの俺達がな」
「だったらそれはそれでいいんじゃないですか？」
フランコは今度も半分笑っていて半分本気の顔であった。
「実際のところ何が真実で何がでまかせかなんてわかりませんよ」
「そうしたものかな」
「そうしたものですよ」
またこう言うのであった。
「世の中ってやつはね」
「でまかせも本当にでまかせかわからないか」
「嘘かも知れませんしね、本当に。ほら」
ここで彼はまた言ってみせる。
「嘘を嘘だって見抜ける人間じゃないと駄目だって言われるじゃないですか。そういうことですよ」
「結局はそれか」
「ええ。そういうものってことですね」
彼は軽い調子でカンセコに言うとコーヒーを片手に自分の記事を見る。そうしてその記事を見ながら惚れ惚れとした様子で笑うのであった。己の記事に。

下水道　　完

２００８・１・１４

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7677d/

下水道

2010年10月8日15時04分発行